“高 分 子” 随 想

祖 父 江 寛*

本誌もすでに195号にも達し、歴代の編集委員長ならびに委員がたの並々ならぬご努力で、まことにりっぱな学会誌として他を凌駕していることはご同慶のいたりであります。食物にたとえれば美しく美味で栄養のある各欄が目白押しに並んでいます。しかし毎日毎日料理屋のごちそうでは家庭のお茶漬が食べたくなり、ときには屋台の焼鳥やおでんが食べたくなる道理、栄養のないコンニャクやトコロテンもおつなものとなるわけであります。いかにおつなものといってもコンニャクだけでは食べられたものではなく、おいしい煮付汁とわさびがあって好ましい食物となるのである。こんなことを考えながら、“高分子”についての随想を述べることにします。

会誌高分子は広範な分野にわたる化学、物理、工学の関係学会の会員や、繊維、紙パルプ、プラスチック、ゴム、塗料、接着剤の製造工業、電気、建築、運輸航空の諸工業、食品、医薬の企業、商業などの広い分野にわたる会員の相互の連係と啓蒙に資するためのものであり、会員各自が自己専門分野に閉じこもらないで、他領域と自由に交流し、本会誌をその交流の場として利用されれば、高分子学会の進歩に資するところ大なるものがあるにちがいない。自分の専門とするところと異なる他領域との交流にはその伝達媒体としての言葉が大切である。難解な専門術語をできるだけさけて平易な言葉で専門外の人々にもよくわかるように説述することは、ある場合には歴史的記述も必要であり、ある場合には百科辞典的な予備知識の注釈も必要であり、あまり容易な仕事ではない。総説や講座の欄は特に平易な言葉でやさしく述べることを要求されるものであるが、他の欄といえども気楽に読めて実になる読み物でありたいものである。しかも専門外の人々から“おや、この方面ではこんなことが行なわれているのか、自分の方面にもこのことを応用したらおもしろいな！”と思われることが、わさびのきいた表現で述べられていたら、いっそう食欲も増して楽しい読物になるにちがいない。高分子科学の進歩は急激で、その応用も著しく、新奇な興味ある部門も多い。しかしながら新しい魅力はやがて発展、成熟の過程に入るとともにうすれてくる。新鮮な芽をそれからそれへと出して行くには温故知新、常にフィードバックが必要である。情報化学の新手段によって成熟期の工業や科学からも十分に栄養を吸収して高分子関連各部門の交流を良くし、おでん屋のうまいだし汁のような味を出してもらえれば、読者の食欲増進によって栄養価が高まり、有益にしておもしろい記事になることは必然である。

高分子科学は化学と物理と生物学との境界領域に新しい芽が続出しており、合成化学や構造化学と物性物理、生体高分子の構造と機能などの各専門研究者の協同を要する領域が多い。

本誌が、学界ではこれら協同研究の温床的栽培地となり、工業界では機械、電気、建築、航空方面と工業化学界の協同開発研究の発芽の培地となるならば高分子科学工業への貢献ははかり知れないであろう。今日のイノベーションの時代において各方面の連絡が必要であり、各方面を連絡すればするほど必要情報量は増加する。ここに情報管理の必要が生れる。限られた紙面に多数の情報を掲載することは至難であるので、情報管理によって選別した有効な情報を読者の食欲をそそるような料理でのせることが望ましい。読者もまた十分な食欲を持って消化吸收してほしいものである。学会の会誌は会員の共有物であり、共有の広場である。会員の意向を反映させてりっぱな“高分子”をますますりっぱに育てるように、会員諸賢の後援を切望するしだいである。

* Hiroshi Sobue 成蹊大学教授・高分子学会会長・工博